行事報告

カップリング・インターンシップ 2018 年度全体最終報告会の実施

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業 国際人材育成部門

特任准教授 勝又 美穂子、特任講師 橋本 智恵、
特任助教 寺西 未沙（全常勤）

2019 年 2 月 6 日（水）に、2018 年度カップリング・インターンシップ（CIS）全体最終報告会を開催しました。本年度は、2013 年度の CIS 開始当初から実施している海外実習型のアウトバウンドカップリング・インターンシップに加え、日本国内実習型のインバウンドカップリング・インターンシップも開始し、合計 7 か所での実施となりました。昨年 12 月 23 日に、最後の実施先であったインド CIS メンバーが帰国、全活動が修了したことを受け、今回は全実施個所の大阪大学参加者が一堂に会し報告発表を行いました。

報告会には、当研究所の関係教員の他、本学 CIS 連携部局である、言語文化研究科・外国語学部、基礎工学研究科、経済学研究科の教員、及び本学以外から、合わせて 40 名弱の参加となりました。

報告会ではまず、本年度の CIS における参加学生の努力への敬意、そして本会を学びの復習の場として活用して欲しいとの当研究所近藤勝義教授からの開会の言葉に続き、インバウンド CIS は IHI 相生事業所、ダイヘン六甲工場の 2 か所、アウトバウンド CIS はタイ（OTC ダイヘン）、ベトナム（IHI インフラストラクチャーアジア）、ミャンマー（J&M スチールソリューションズ）、インドネシア（チレゴンファブリケーターズ）、インド（ISGEC/日立造船）の 5 か所からそれぞれ 15 分ずつの発表を行いました。各発表は、活動概要、CIS で取り組んだ課題への提案内容、各自の学びなどが完結にまとめられており、充実した報告でした。企業実習を通して日系製造業について、グローバルで活躍する企業についての新たな学びがあったことは勿論ですが、CIS 全体を通して「言語さえできれば何とかなると思っていた概念が打ち砕かれ、互いを知ろうとする努力が何よりも重要であることを学んだ」、「文化の異なるメンバーでやり方、考え方のプロセスが揃わなくても、チームとしてまとまるためには同じ目標を共有することが一番重要だということを学んだ」、「海外の学生を日本へ迎えるホスピタリティの難しさを経験した」など、様々な学びが報告され、一皮むけた学生の姿を見ることが出来ました。基礎工学研究科の馬越大教授からは「学生の学びに共通していたのは『互いの尊重』であり、大変重要なことを自らの力で学び取っていた」との締めくくりの言葉がありました。

CIS の活動は、受け入れ企業の多大なるご支援、そして学生を派遣して頂く海外大学との連携で成り立っています。沢山の方々のご理解とご支援により成り立っている CIS だからこそ、参加学生が自らの学びを振り返り、咀嚼し、次へつなげていく重要性を改めて感じる会となりました。